

〔新収品紹介 3〕

蘭石図屏風 与謝蕪村筆

四曲一隻 紙本墨画 167.8cm×370.4cm

ここに紹介する与謝蕪村筆の屏風絵は、昨年暮れに襖四面として見つかったものですが、今回当館での初公開に際して四曲屏風に改装されたものです。

図柄は一見して判るように、岩陰に咲く蘭の花とその葉が風になびく様を描いたものですが、これをいわゆる四君子画の一つと見るならば、蕪村の画としてはたいへん珍しいものと言わなければなりません。というは、数ある蕪村画の中で、蘭菊梅竹といった四君子画が極めて少ないという理由に加えて、「蘭」の図というものが、これまで一点も知られていなかったからです。また、襖という大画面に水墨で樹石のみを描くということも珍しいことです。思い起こしても、妙法寺の蘇鉄図屏風や角屋の紅白梅図屏風(共に重文)など数点を数えるのみです。

こうした図柄や形態の珍しさに加えて、本画には更に珍しい点があります。と申しますのは、本画には実は二つの落款があり、しかもその款され方が非常に特異なものであります。一つは左第一扇中央やや左に、「謝寅漫写」と記されていますが、もう一つは実物に対し

でも容易には判らない所に款されているのです。それは「謝寅」落款の左下の岩の中に、「夜半翁」と記されているのです。一つの画に「謝寅」と「夜半翁」の二つの落款が記されていること自体、たいへん珍しいことですが、この「夜半翁」落款が、あたかも「隠し落款」のように記されているということは、異例中の異例と言わなければなりません。最初この落款を発見した時、後落款かと疑いましたが、よく見ると「夜半」の二文字がしっかりと書かれていながら、三文字目の「翁」の字がにじんて岩の墨と解け合っていることから判断して、岩を描いた墨がまだ一部で乾いていない時に、この落款が試みられたと考えられ、作画と平行して記されたと推察されます。この「翁」の字がにじんてしまったので、改めて「謝寅漫写」と申し訳の意も込めて書き直したのでしょうか。それにしても、なぜ岩の中などに款しようとしたのか不思議です。

蕪村はいわゆる俳画には「蕪村」「夜半」という俳号をしきりに用いています。それ以外の画には「謝春星」「謝寅」といった画号を用いて、はっきりと区別しています。

ところが晩年に近づくに従って、俳号を款した水墨画が多くなって来ます。その傾向を見ますと、どうも俳人の眼を強く意識して描いた時、一見中国風な画の場合でも、俳号を款することが多いようです。そうしますと、本画も一見四君子の「蘭」図のように見えますが、背後に俳諧的発想が込められているのかも知れません。

最初に申しましたように、この画はもと襖仕立てでしたが、それを屏風に改装したのは、細部の観察の結果、次のような結論を得たからであります。即ち、この画は予め仕立てられた襖を立てておいて一面一面描いて行ったのではなく、紙四面を横に敷きつめ、手前に坐って左から右に相当早い筆運びで描かれたのであります。両端の岩の塗の部分に畳目が浮き出ているのも、図柄が画面下部に集中した独特な構図になっているのも、こうした特殊な制作状況が生んだものなのです。ですから本画の生命は、力強い筆運びで左から右へ一気に描き上げたところにあり、その流れるような連続感を生かすには、一面一面枠で画面が区切られる襖よりも、枠をはずして屏風にされた方が、この画が生きると考えたのでした。

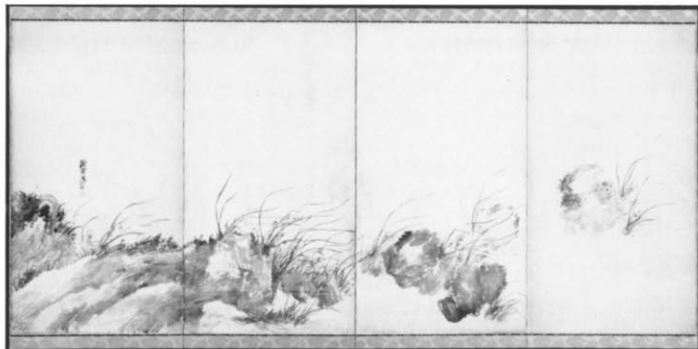
本画は筆者の息遣いを確実に伝える岩の力強い筆致や早い筆運び、更には風の息吹を的確に伝えるような蘭の葉の自在な筆使いから見て、蕪村晩年の心身共に最も充実

した時期の作と思われまます。

なお、襖の解体中に表裏計八面の下貼りから、偶然にも多数の手紙や証文が発見されました。下貼りは鱗状にびっしりと貼られてあり、その数は千枚を超えるでしょう。普通襖の下貼りの反古紙には、様々な文書が混ざっているものですが、今回の場合、手紙の多くが「大文字屋 柴山清左衛門」宛とその女主人宛と思われるものに集中し、証書類もすべて「柴山」家宛であることから、これらは適当に寄せ集められた反古紙ではなく、一括してあったものと思われまます。手紙・証文の中には住所が書き添えられているものが何通もあり、それによるとこれらの文書の主は「大津京町一丁目」の「柴山」家と知られます。

一般に襖絵とその下貼りとは直接結び付けて考えられるものではありませんが、蕪村と大津との深い関係を思いますと、いろいろな想像ができます。こうした意味で、本画は蕪村晩年の優品ということに留まらず蕪村の作画環境を種々と想像させる資料を多様に含んでいる点でも、興味深い作品と言えます。8月30日の日曜講座では、こうした問題も含めて、襖から出てきた手紙や証文などを見ていただきながら、本画についてもう少し詳しく紹介してみたいと考えております。(早川聞多)

蘭石図屏風 与謝蕪村筆



「謝寅漫写」



「夜半翁」



下貼りの反古紙



季刊 美のたより No.80

昭和62年 8月20日

発行 大和文華館